



## 日本人論に思う

Contention of the Japanese Natures

笠倉 忠夫

Tadao Kasakura

EICA 名誉会員

「3・11」（東日本大震災）は極めて悲惨な災害で改めて深甚な哀悼の意を表します。この悲惨な災害は反面で世界に日本人の素晴らしさを知らせる契機にもなりました。震災発生から24時間後に当地に入った外国人ジャーナリストは被災地の商店が食べ物を無料で配った現場のエピソードを「恐ろしい現実の中での日本人の冷静さ、悲しみの中での気高さ、助けを待つ間の忍耐強さを、すべての外国人記者が称賛し、世界に伝えた」と語っています。そしてこのニュースに世界中の人々は日本人の素晴らしさを絶賛したと言われます。

悲しみを癒してくれる大変喜ばしい出来事でしたが、それ以降俄かに国内で日本人に関する著書、所謂「日本人論」本が急増したようです。私も何冊かを手にしましたが、何れも日本人の性格や気質・気風の素晴らしさを再認識しようという体のものであります。確かに我々日本人は温和で、モラルも高く、“和”を尊ぶ協調性を持つ民族であり、これらは日本人の美風と言っても良いでしょう。一方で、日本は古来、天災の多発する国土で在りながら一神教の様な強固な信仰心を持たず、無常、諦念と言った国民性を作り、場の空気を読んでそこに溶け込むという社会を形成して来ました。

この様な性格・気質は欧米を中心とする他の先進国と比較して、かなり対照的かつ特異なものに思えます。単純に比較すれば、「理念的」と「感性的」の違いと言えないでしょうか。欧米、殊にその源流となった西欧においてはギリシャ哲学やキリスト教教義を通して、物事を論理的に考えて行く伝統が育まれ、ルネッサンス期には *scienza* (E. science) を生み出し、理性、理論を重んじる合理主義へと繋がって行きました。一方で、キリスト教と言う強固な一神教は人々の内面の倫理基準として受け入れられており、合理性と矛盾することなく個人主義を育てて来たと考えられます。

これに対して、日本人の性格や気質がどの様に形作

られたのか、かつて日本文化の Archetypus (アーキタイプス；かくれた形) を探るという講演会が行われ、それを纏めた：加藤周一他；「日本文化のかくれた形」(岩波現代文庫、学術128) が出版されています。その中で編者の武田清子は、これまでの多くの論者が日本人の発想様式、思考と行動の特性は非合理的な日本特有の特殊主義的、閉鎖的な性格にあると指摘してきた事を述べています。確かに日本は四周を海に囲まれた島国でありながら、中国や朝鮮を経て様々な文化が流入して来ました。しかし、それらを巧みに混交し、様々な変遷を経ながらも独自の日本文化を作り上げて来ました。ただし日本の場合、西欧の様に倫理基準を個人の内面に持つのではなく、世間体や外聞といった個人の外部に持つ「空気社会」を作り上げました。この様な文化は「恥の文化」と言われます。

長い歴史を通して、洋の東西でそれぞれ独自の人間の性格・気風そして文化が形成されて来ました。それらが現代の社会にどの様に表現されているかに興味が有ります。私にはその差が科学技術の分野にかなり明確に表れているように思えます。科学理論は合理主義的思考の中から生まれ、応用分野である技術は優れた経験主義的感性に育まれると言っているのではないのでしょうか。スーパーコンピューター「京」の開発者の「アメリカは、スパコンはどうあるべきかと演繹的に考える。我々は、世界一を取るのにどうするか帰納的に考える」という発言は上述を見事に言い当てています。戦略と戦術との使い分けとでも言いましょうか。

しかし、いま日本が得意として来た技術の核心：ノウハウが徐々にコンピューターに置き換え可能となるであろうと予測されています。そして開発される新たな技術の中進国による追い上げ、これらは技術大国日本にとっての大変な危機です。この様な危機を乗り越えて行くためには、科学技術教育の徹底的な見直し、改革しか有り得ないのではないかと考えます。